●本誌は世界主義を標榜して婦人解放を主眼とす

世界婦人

○本號目次
△婦人解放と社會主義　幸徳秋水
△結婚法の改良　安部磯雄
△婦人解放問題雜感　深尾韶
△中身　孤骨
△小說 木兎　谷尾水紫
△小說 金の力　西川さつき子
△家庭雜話　ひで
△[illegible]時事
△[illegible]時事
△[illegible]山より婦人の手によりて引き出さるゝ石材運搬
△[illegible]

婦人解放と社會主義

幸徳秋水

（一）

婦人解放の第一着は如何にすべきと問ふ人あらば、予は直ちに答へて曰ふべし『先づ社會主義を知らしめよ』と

（二）

婦人をして選擧權を得せしめ、參政權を得せしめなば、婦人は解放さるべしと說くものあり

選擧權！參政權！是も亦無きには勝るべし、何かにつけて便利なるべし、而も選擧權を有する歐米の勞働者が、依然として地上の不幸の奴隷たり牛馬たり自動器械たる地位を脫する能はざるを見ば、婦人が選擧權、參政權に依りて贏ち得る所は、大低知るべきに非ずや、米國の諸洲には既に婦人の投票權を得たる地方もなきに非ず、是れ迄に目出たしとは言へども、毫も之を以て『婦人として』受けたる束縛桎梏より脫し居らざるなり

政治運動とは腐敗の別名なり、名與と利益の投機なり、他を押退けて自ら取るとなり、安く買ふて高く賣るとなり、或小數政治家が之に依りて勢利を摑むが如く、或る少數の婦人も之に依りて勢利を摑むべき機會に投ずるを得べし、而も政治は決して勞働者全體を解放し能はざるが如く、また婦人全體を解放し得るものにあらず

（三）

婦人をして醫師たり產婆たり敎師たり記者たり美術家たり判任官たり、換言すれば職業の獨立を得せしむれば、婦人は解放さるべしと說くものあり

一應最もに聞ゆれども、而も其實弱き婦人を驅りて、强き男子と生存競爭を爲さしむるものにして、其唯一の利器は唯だ賃銀の廉價てふ點に在るのみ、家內に在りて男子に壓制束縛さるゝも苦痛なれども、社會に立て一面同業男子の競爭に當り、一面雇主の掠奪に抗するも、今日の弱き婦人に取りて甚だ難事と言はざるを得ず、今日の如き自由競爭の激烈なる經濟組織其儘にては、職業の獨立てふとも、殘酷なる悲劇を意味するものにして、多數婦人の堪へ得ざる所なり、否な少數婦人の成功者と雖も、永久に其地位を維持し得んとは覺束なし

米國無政府黨の領袖エンマゴールドマン女史は近時『婦人解放の悲劇』てふ大論文に於て今の所謂『解放されたる婦人』即ち獨立の婦人の氣の毒なる由を說き、彼等が相當の市價に達する爲めには其肉體的精神的の安樂を全く拋棄して、其元氣精力を竭盡せるの狀を述べ、幾行の婦人が『獨立』に閉口し疲れ果てゝ、遂には嫁入の口の有り次第に、早速喜んで承諾するもの怪しむに足らずと論せり

ゴールドマン女史は亦謂らく、今日激賞せらるゝ『獨立』なるものは、所詮婦人の天性たる戀愛的本能、慈母的本能を漸次に麻痺し萎縮し去るものなりと、然り、婦人の天性は戰鬪競爭に非ずして、戀愛なり、慈愛なり、婦人は戀せずして活くるものに非ず、子なくして活くるものに非ず、戀なく子なき婦人は、肉體に生くるも既に精神に死せるなり、如何に其職業の獨立を得るも、戀なく子なく精神的に全く婦人の天性を喪失し去らば、之を解放を得たりといふを得べけんや

鑛山より斫り出さるゝ石材は斯の如くして婦人勞働者により、峻坂嶮路を運ばれて、市場に出さるゝなり。されど其の石の一つも彼等には用なさず、徒に資本家と富豪の邸宅工場を飾るに過ぎず

（四）

人は自己のみ獨り自由を得可きものに非ず、萬人皆な倶に自由なるを得たる曉に於て、初めて完全なる自由を享受し得べし、假令二三の婦人成功者が獨立の生活を爲して、權勢利益を摑み得たりとも、一般婦人の地位進歩せざるゝ間は、決して社會的に解放さるゝを得べきに非ず、博士ジョンソン曰へるあり、狗兒の後足で立つが如し、人は唯だ婦人なるが故に稱贊するのみと、是等成功婦人も亦二足にて立てる狗の如く、唯だ例外として稱贊さるゝのみ、若し男子の如く無遠慮に立振舞はんか、直ちに現時の道德習慣を以て律せられ、生意氣、不道德として擯斥さるゝに至るべし

故に一人の婦人の解放は、必ず萬人の婦人の解放に伴はざる可らず、肉體の解放は必ず精神の解放に伴はざる可らず、婦人階級全體を擧げて、自由に其天性本能を發展し、自由に食ひ、自由に着、自由に戀愛し、自由に子を生み、之を撫育し養成するを得せしめざるべからず、これを成すの途は、現時社會の激烈なる經濟的競爭を廢し、弱肉强食の階級的制度を廢し、老幼男女賢愚强弱を問はず一團として相互扶助の共同生活を開始するに在り、能く如此くなれば、獨り肉體的經濟的に婦人の自由を得るのみならず、亦精神的に道德的に解放さるゝを得べきなり、何となれば現時の婦人を束縛する偽善なる壓制なる道德宗敎は、皆な今日の競爭制度、階級制度の社會が發生する所にして、社會組織の一變すると共に其權威を失墜すべき者なればなり

之を是れ社會主義の實行といふ

（五）

故に曰ふ、婦人解放の第一着手は婦人をして社會主義を知らしむるに在り、先づ之を知らしめよ、知らば必ず之が實行に力むるに至らん

然り、社會主義は婦人解放の唯一手段なり、誠意に眞面目に婦人解放を望むの婦人にして、一たび社會主義の何たるを知らば、彼女は直ちに社會主義運動を爲すの已むに已まれぬものあるを感ぜん、社會主義を知て、社會主義の爲めに運動するの意なき婦人は是れ精神的不具者なり、怠惰者なり、先天的奴隷なり

海水浴にありし一夜

女浪生

落莫たる波の音、慘憺たる月の影、有情の天か無情の地か、人の世は何物ぞと、又今更の如く磯邊に立ちてはかなき瞑想にさまよふ。覺束なき心と肉を、此濱にさゝへてより朝夕の冷たき波の音、靜なる松の風いと心細し。暗き運命の冷たき手にさいなまれてうつろひ易き萬象の影に迷ひつゝ、悶へつゝある若き人の子は、いづちいかなる處にさまよふとも、激昂したるそがハートの靜まるべしとも覺へずあゝ狂ひ叫ぶ其聲のいとすごからずや。

世は革命よ宗敎よ敎育よと、尊き聖人達の美しき大旗の許に走り給ふ。いと淸しされど〳〵そを何物とも知らず、我世の暗に悲哀涕泣苦悶せる者は彼等をして唯人爲のたはむれと云ふ。然り殊にたはむれのみ。彼等にとりて何の得る處もなければ。神の世？人はかくも狂激なる者か、文明の世？人はかくも暗愁なる者か、あゝ我れをして此世の光いづくにと云ふを止むる勿。

△友に送る

隻影單身を抱いて臺灣の蠻村に寂寥の生活を夢むらむ君！いかに怨恨は多く苦痛はしげからむ、よし新高の山村老大の樹林、倶に君が壯絕の思圖を讃美すと雖も、東天遠く眺むる月の、君に思をよせん時、情炎の君そもいかにとや見玉ふ乎。夏のこの頃、六日夜の月は淋しげに靑天に照りつゝ遙かまた臺灣の山村にも君が蓬窓を照らすならむ。

あはれ何等の慰安もなく、可惜靑春二十才の春を、空しく蠻境の寂寥裡に葬らむとする君が心胸果して蔵なきや、いくた君の友が情界の花に醉ひて、快樂の夢にはぐくまるゝ時、君は獨り蠻村の宿に、世の冷酷に泣かざるべからざる乎、あゝ君が運命の悲しふ所、夫れ落寞の行路のみかは。

●女子大に讀むべく男子盛んに讀まさる可からず

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

海外時事

萬國社會主義婦人會議

第七回萬國社會黨大會は去八月十八日より獨逸スツットガルトに開かれ、日本の社會主義者よりも代表者を出席せしめたるが、右大會開會の前一日即ち八月十七日第一回萬國社會主義婦人會議も亦獨逸の婦人同志の主唱に依て同地に開かれたり、會議の詳細は何は知るに由なけれど豫備日程は(一)各國社會主義婦人運動の報告(二)各國の社會主義婦人團體中に一定の通信機關を設くること(三)婦人選擧權のこと等にして何づれ後報を待て報ず可く、婦人問題の最後の解決は社會主義の革命に依るの外なく社會主義の運動が世界的萬國的の運動たる以上は婦人運動も亦た萬國的運動たらざる可らず、されば次回の會議迄には是非共我國の同志婦人より此會議に代表者を出だすの決心を以て目醒しき活動を始めたきものなり

諾威と女子選擧權

諾威の議會は過日四十七に對する七十三票を以て女子の普通選擧權(即ち成年の女子に總て選擧權を與ふる法案)を否決したれとも二十五に對する九十六票の多數を以て女子に制限選擧權(即ち選擧資格を財產にて制限す)を與ふるの法案を通過したり然して此法律に依て選擧權を得たるものは廿五歳以上にして自身又は良人が一定の所得稅を納むる者に限り、其數も三十萬に過ぎずと謂ふ、一日も早く選擧權を得んが爲に制限選擧と云ふ大抵の所に讓歩す可きか又は飽く迄女子の普通選擧を獲得する迄は一歩も讓らずして鬪ふ可きか、之れは英國などにても議論となれる所なり、今日日本の女子に制限選擧權を與へたりとせば之に依て選擧權を得可き女子は、男子の抑壓に對して反抗の氣慨もなく、改革思想もなき中流以上の貴夫人方に過ぎず、之では選擧權も畢竟紳士閥男子の勢力を助くるの用に過ぎざる可し、一體男子より進で與ふるが如きものは必ずや女子に不必要のものにして、男子が與へざらんとするものこそ即ち女子の獲得せざる可らざるものなれば女子は常に男子に對して反對的の態度を明かにせざる可らず、諾威の女子運動は更に一段の發奮を要す可し

女子は學術に適せざる乎

英國バーミンガム大學にては此程學位授與式を行ひ、多數の女子も學位を受け、學術界に於ても女子は決して男子に劣らざるの實を示したり、バチエロア•オブ•アーツの學位を得たる者廿五名中廿四名は實に婦人にして、他に哲學博士を得たる女子一人あり、學位其物は別段人間に有難きものならねど、之に依て女子は智識界に於て到底男子の敵にあらずなど、謂ふ男子の傲慢よりも勝手氣儘に取きめたる獨斷論を挫き、同じく女子自屈の習慣を一洗す可き也

女子教員の運動

近着の「社會主義婦人」に依れば紐育の女教員は男子と同一の給料を得んが爲に奮鬪しつゝあり、彼等は男子と同一の職務を果しつゝあるに係らず、給料は就職當初に於て男子の三分の一、夫より漸次增給して男子の二分の一を最高とせり、右に就き女教員の一代表者は官廳に訴へんが爲め此程ブルークリンよりアルバニーに赴きたるに、男子教員等は同時に代表者を派して、奇怪にも之が妨害運動を試みつゝありと謂ふ、女教員の薄給なる理由は元來女子が男子に劣るとの口實に依るものなれとも、前號の本欄にも記載したるが如く米國其他に於ては由來男子專屬とせられたる激烈なる體力勞働さえも漸時女子に課せられつゝあり、社會は女子にも男子と同樣なる體力の勞働を强ひながら、尙は女子の劣等呼ばゝりをなすは奇怪千萬と云ふ可く、殊に教育界の如きは女子は全然男子と同一の勞働に服しつゝあり、されば同一の勞働に對する男女平等の報酬は先づ教育界に於て實行せられざる可らず、我邦の女教員諸君も發憤一番ありたきものなり

ルイ•ミセルの紀念像

猫も杓子も銅像となるは日本ばかりにあらずと見へ近時佛蘭西にても行く所として立像や半身像に突き當らざるはなく、一體何の功績の爲に紀念せられたるかをも知られざるもの多きが中に、何人も尤もなりとするはルイ•ミセルの像をモンマルトルに建てんとする計畫なる可し、ミセルは何人も知る佛國の革命婦人にしてコンミユンの一役には男裝して自ら要塞を守り、捕へられてニユー、カレドニアに流され九年の後大赦に遇ふて歸國するや、皆に優る激烈なる無政府主義を奉じたる爲め屢々獄に投ぜられ終に倫敦に逃れたり、今度の計畫に依る立像は此偉大なる女子革命家が片手に稚な兒を護れる狀にして且つ足元に一匹の猫を彫刻したりと謂ふ、こはミセルが動物を愛せしと甚しく、憐れなる犬猫と見れば直ちに連れ歸りて養ひし溫き愛情を表はさん爲なりき

市內時事

老車夫罷職問題

仄かに承りますれば、警視廳にては來る十月中に於て五十五歳以上の車夫君に車輓きの職業を禁止させ給ふとの事、勿論齡五十に達して斯ゝる力業の職業を自ら好んで遣つて居る譯ではなく、矢張り生きて居るからには糊口せねばならぬより、苦しきながらも勵んで居るのですが、それを、今度警視廳で氣の毒と思はれてか見だしの如く禁止して仕舞ふとの事ですが、誠に結構の事と申さねばなりませぬ、そうして、斯ういふ憐れな老人共をそういふ職業に就けておやりになるのでしやう、多分文明開化と誇り玉ふおかみの事ゆへ、年寄に似合ひの仕事を授けらるゝか、さもなくば養老院でもこしらへて、老後を安氣に暮させておやりになるのでしやうと私は自分の理想社會が實現さるゝ樣に思つて喜んで居りましたら、或新聞では年寄の車夫君が車を挽いて居つては文明開化と誇り大國の體に入つた體面を汚すから、車夫君が餓死しやうが如何しやうが、かまはない、只々鑑札を取り上げて仕舞へばよいとの、隨分無理非道なる御處置をなさるとの事、併しこんな無法の處置を老車夫君に施して唯々諾々と餓死を待つ人があると政府者は思つて居るのでしやうか、そんな、馬鹿な人も居ないようですがねえ、よくお考へになりませんと、とんだ體面を汚す事になりはすまいかと私は心配でなりませぬ

學習院內訌

(學習院女學部の內訌)

學習院女學部の職員等は先頃來下田派と同田派とに別れ盛んに其權力爭ひをなしつゝあるとの事なるが、いづれ權力萬能を謳歌する人々の事とて斯ゝる醜聞卑劣の行爲は當然の事なるべし、しかも現今最上流の教育家を以て任じながら其の職分を忘れて徒らに醜陋の態を示すは何事ぞ、下田女史、よ希くば斯ゝる權力階級思想を洗ひ去つて、吵たる吾等平民階級に投じ而して貴金と權勢と鐵鎖によつて縛はれたる紈袴子弟を赤裸々に剝ぎ勇猛奮鬪せられては如何、敢て問ふ

轢死女、鐵道自殺

巣鴨の停車場を出た、二條の鐵路は、切り開いた山の間を拔け、高き杉の森を繞て、竹藪の繁みを通り越すと、左右岡として開けた高き堤の上に出る、右に廢兵院の建物を、森林と松と杉との間に見て、左は遠く養育院の黑板塀から、名高き櫻の蕾の森を離して、高等師範の白壁が見へる、前は空蟬橋の形よき松の林と鎭守の森の高い銀杏の樹との間に、巣鴨監獄の高塔が見へる、丁度其所である、廢兵院が右に、養育院が左に、監獄の高塔が前に見へる、丁度其所である、今朝一人の轢死者があつた、其は未だ妙齢の一婦人であつた、股の邊より二つにせられた屍體から、二間を隔て、引ち切られた手首が、蒼白の色に當時の慘絶を物語つて居る、脫ぎ捨てゝ置いたのか、はた苦悶の際擲に振り飛ばしたのか、貳ツの下駄の、一つは轉倒し、一つは正しく、何事をも知らぬ樣に、安然として置かれてある、何故か、ままでの血痕を止めない、貳條の鐵路は坦々として、遠く巣鴨驛まで連らなつて居る

巡査一人、驛員三四、心なき見物人の七八人を纏めつゝも、骸は闇を寫して居る

ア、抑も何故の死か

何れは、世と人の强き迫害に耐へ得で、我れと我身を冷き鐵路に横へたのであろう、憎い憎い現世に對して我れから絶交を宣したのであろー、ア、自殺…、浮世に愛想を盡かされたと云つて、山に逃げ込む、意氣地なしと、超然と云ひ、超然と云つて、世と投交渉たらんとする、卑怯者とは、同じ樣に悔いけれと、强い此世の、盲智慣と惡道德に壓し付けられて、定つて正すの力もなく大膽に卒直に、己が敗れを公にして、我れと我が身を殺すとは、寧ろ此れ可愛いではないか、況んや此の……………養育院と廢兵院と監獄の高塔を望み見る……………現代に對する愛想盡かしの最佳の場所に、絶交の宣言を公にした、彼女の最後は、又中々に痛快ではないか、事殿黨、藩閥黨が此の絶好の場所に、大擧して、枕をならべ、厭世の歌を合唱して、現代にボーイコツトを宣言したならば更に一層、痛快ではなかろーか、夏の曉の濃き霧をつんざいて、監獄の汽笛が、けたゝましく響いた、ア、耐へ難き不愉の朝ではある(八月十八日記)

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

婦人解放問題雜感（二）

深尾韶

○世の中の男子間には婦人問題に對する解釋が二通りあつて常に相爭つてゐるのだが、其一つは婦人を開放する主義、一つは婦人を奴隷にする主義である。

◎婦人奴隷主義者は、婦人が男子の意を迎へて種々の阿諛をしてくれるのをば、非常な愉快に感ずるので、此屈從を贏ち得るを以て世の中の最大幸福と心得、婦人には精神も無く意見も無きものとして、自己の思ふが儘に、右を向け、左に歩め、立て、坐れ、と色々に命令し、あやつり芝居の如く自分の命令の其まゝに行はるゝを見て、歡喜の聲を擧げ、世は此くも樂しいものであると誤つてゐるのである。

◎婦人解放主義者は、婦人に何等の獨力心なく、折角の相談にも乘つてくれぬのをば、甚だしき不愉快に感ずるが故に、婦人の智慧識見をば男子と同列にまで引上げ、共に事をなし世に立たんとする。

◎此解放論者と見るべきものにも細分すれば二通りの種類がある。一つは全たく男子を標準として、男子の爲に婦人解放を爲さんと云ふもので、一つは解放と云ふからには、男子を見安とするが如き不義は出來ぬとて進んで婦人を標準とする解放を行はんとするものである。前者に從へば婦人解放と云ふも實は解放では無くて、男子目前の利益となる範圍だけ自由を許すに過ぎない、婦人解放の弊害を擧げて、色々と注意すべき條項を列べたり、婦人議員を罵ばなかつたりする論者は皆此の男子本位の論者である、若し婦人を主體とするならば、例へば男子が之に壓せらるゝ虞れがあつても女が子を産む事を拒絶するに至らうとも、將又、如何にお轉婆になり行かうとも、苟も婦人の自由とあり、婦人の好みとあつて之を爲すには、男子が決して喙を容るゝ事も出來ず又する必要も無いでは無いか。

◎今の男子の要する所の婦人は、幾百年幾千年の習慣に依つて、獨立せざる婦人、唯々諾々の婦人、良人の意見の外に意見なき婦人である、良人の行動に反し、反對の意見を立て、若くは良人の指揮を受けずして獨立の生活を營むが如き婦人は、多くの男子に取つて大禁物である、婦人の自由、婦人の解放を叫ぶ志士にして、尚ほ内心は女學校の良妻賢母教育を喜ぶの風あるは、怪異すべき現象では無いか、

◎女子の中等教育を與へらるゝ場所に於ての教育方針は、女學校が特に世の風潮に逆らつて方針を立てたのでも何でも無い、世人の需用そのまゝが、茲に來つて良妻賢母の教育となつたのである、此教育に依つて女子は喜んで男子の壓力下に立たねばならぬのである。婦人の天職は家を守るに在り子を育つるに在り、良人を助くるに在りと云ふ事に決つて了つた。

◎女學校ほど滑稽な滑稽を演じてゐる所は無い。婦人奴隷主義を男教員の口から女生徒に一生懸命に吹込んでゐる。それで、それほどに侮辱され乍ら、怒る生徒が一人も無いから可笑しい。

◎良妻賢母主義を攻擊する人も、其人の平生の行ひを見ると、矢張り妻君をば家に置いて自分ばかり飛び歩いてゐる、臺所は一切任せて自分は手傳はうともしない、否手傳はぬばかりか、手傳ふ事を以て男子の不面目一大耻辱と心得てゐる、會々妻君を外に出すかと思へば、それは自分の行爲自分の運動を助けて貰はんが爲で、決して自分の爲すとに反對して貰はんが爲では無い、之が何して婦人解放と云はれやうぞ。

◎一家の内に住まへば、主義、識見などが相類似するのは自然の數であるけれとも、十人が十人、百人が百人、同主義同意見になつて了ふといふ害は無い、婦人の方も餘り生地なさ過ぎるけれと、男子としても亦多少の責任を免れぬと予は思ふ。

◎當今の婦人は、おしなべて猫みた様なものである。猫以上の婦人は寥々として晩天の星も啻ならずである、幾度も〳〵吾等の言ひ悉し屬り悉した如く、彼等の目的は男子に依つて衣食を得る事（即ち賣淫）と、生殖との外には無い、彼等は男子の爲に自由を制限せられて纔かに其お殘りの飯と肴に有りつき、男子の膝に眠りて、自から得たりとする粉黛倖悦の動物である。見よ其の媚ぶる眼、嬌態を作る震、喃、宛然サカリのついた猫のザマでは無いか、こう云はれても怒り得まいがナ。

◎自覺したりと稱せらるゝ婦人も幾人かある然しながら男子に依らぬ生活、男子以外の識見、男子と異なれる運動を持つてゐる婦人は幾人あるか、予は謂はゆる自覺婦人と云はるゝものの心細さに泣かざるを得ぬ。

◎便佞の友、阿諛の友、雷同の友は事に當つて用が無い。男子の友として眞に必要なる婦人は、切磋琢磨の友、侃々諤々の友、諫爭の友で無ければならぬ、社會は目前の小なる一致者よりも、他日の大なる一致者を望むのである。

●電車雜感

ひで

私は家内に居る時は二六時中少しも腦を休める餘暇がない、家中を見渡せば小供の冬着を洗濯して仕立て直さねばならぬのが山ほど積んでありますし、寒くなるから、障子も張り直さねばならぬし、座蒲團もこしらへねばお客が見へても出すことが出來ぬし、臺所に行けば米ざるが鼠に食ひ破られて使はれぬ様になつて居るし便所が汚ないから掃除せねばならぬし、小供に小言を言ふのみで少しも慰安を與へぬから少しは野外に散歩かた〳〵同行したいと思つたり、自分の平常着をこしらへねばならぬがモー編輯日が迫つて來ると、其心の内の忙がしさといつたらほんに家に居りては、目の廻る程ですから、何と思つても私の如き貧乏性なり亦貧乏人たる者は少しも精神の修養なり讀書の暇はないのです。其新知識欲は此節になつて益々深くなつて來るのです、それゆへ廣告取りに出ます時は新宿より電車に乘りて尾張町邊まで參る時間が隨分讀物も讀めますし、空想も恣にする事が出來ますから、此時間ほど私の腦の靜まる時はありませんのです、人は皆電車に乘ると騷がしいとか、動搖の烈しいので目が廻るといひますが、私の如き貧者に人となりし者は實に幸です、此時が人生の意義をも會得する大切の時間ですの、時には隨分滑稽なる出來事もあるのです或時は舊知の友で暫らく訪問せざりし人が其電車内にありて私の乘車せるを知りながら、先方は男子の事とて婦人の側まで來て態々言葉を交すもおかしいと思つて隨分長い間默過して居つたのだそうですが、丁度私が尾張町の乘り換へ場所で倉惶下車せんとする刹那に不圖顏を見合して、アヤ、マア、と驚きしが乘り換への混雜に妨げられて、終に言葉も交さざりし阿呆らしき事をするのです實に吞氣ではありませんか、亦或時は讀書を止めて人々の性質研究に眼を晒して居りますと、或貴婦人のルビー或は黄金の指環を双手にぴかつかせながら、意氣傲然と電車に乘り、大きな包み物を下女に持たせ、おまけに子供の三人も連れしかも子供は無賃にて乘車せしめ、少しも耻ぢず恬然たりと云ふ有様そこへ或る停留場より老婦の貧しげなるが是も同じく大きな包み物を背負ひて乘車しましたから私は好奇心を以て此貴婦人の爲さん様を見て居りますと、大包みを背負ひし老婦は腰掛けが皆塞がりて寸隙もあらざるに其失望苦痛は顏色に顯はれ終に此貴婦人の前に來〳〵て、泣くが如く其包み物を暫時と訴ふるのです、それに貴婦人は、聞かぬふりして、澄ましたものです、これを傍觀せる私は怒り心頭より發しまして自分先づ代りて席を讓ると云ふ態度を忘れ貴婦人に向ひ、あなた其包み物を取り除けてお膝にお置きなさつては如何がです、あのおばあさんは大きな包みを背負つて立つて居るではありませんかと詰りしに、彼貴夫人は苦笑して、其包みを取り除け私の顏を惡らしげに見つめて居られたり隨分肉の結構は殘忍酷薄の二た目と見られぬ恐ろしきお顏なりし、斯かる同情心なき貴婦人もおはすゆへに貧乏人なる下級者の憤怨も集中されるなり所謂沐猴にして冠せる御連中と申したくなります

斯かる有様を見聞する毎に電車内にて日本國民の如何程までに公共心の發達し居るや否やと其眞像を窺知する事が出來ますが、斯かる貴夫人や紳士と稱するものの、同等たるべき場處にまで、利己心を増長せしめ其席を占領して他を顧りみず傲然たる擧動を見る時は實に憤慨の念に堪へず此等の人々を取締るの必用あるを認むるに反して、車掌等の斯かる貴夫人紳士に對しては是等の行爲をも寛容して責めず而して勞働者下級者を見るに隨分殘酷の行爲をなすを認めてはいつも憤慨する事です（未完）

富めるもの神の國に入るよりは、駱駝の針の孔を穿る、却つて易し

（馬太傳十九章）

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

結婚法の改良

安部磯雄

女子を他に嫁せしむるに就きて兩親の苦心といふものは一通りでない、彼等は其女子が嫁して其夫や舅姑に満足を與ふるや否や等に就て心配すると同時に所謂嫁入支度といふが如き物質的方面の事に關しても少からず心を勞せねばならぬ、若し從來の如く女子の教育といふものが簡單であつて、僅に普通教育の初歩を授くる位に止まるとすれば嫁入支度の爲に比較的多額の金を要することも敢て重荷ではないかも知れないが、今日の如く女子教育は男子教育と大差なきに至りては兩親たる者は女子の爲に二重の費用を負擔せねばならぬ、是れ吾人の一考せねばならぬ所ではあるまいか

女子教育に餘り重きを置いて居ない兩親の爲には斯の如き事は左程重要なる問題でもあるまいが世には女子の教育と男子の教育とを同一視し出來得べくば女子にも大學教育を授くべしと考へて居る人も少くないだらうと思ふ斯る人に取りては女子教育が如何に經濟的重荷であるかは多く言ふの必要はあるまい試に男女の教育費を比較せよ女子は純粹なる教育費に於て殆んど男子と相違なきと同時に彼等が衣服の爲に金を要することは到底男子の及ばざる所ではないか斯くて男子は教育を終るや否や社會に立ちて獨立の生活を爲し得るに反し、女子の多數は他に嫁するが爲め其支度として更に數百乃至數千圓の補助を兩親に仰がねばならぬのである。若し兩親にして充分なる資産を有する人ならんか、此の如きことは勿論容易の事に相違なきも中流の人にして女子の爲にこれ程の金を投せんことは頗る困難である、これが爲め兩親は知らず／＼女子の教育費を節減してこれを結婚の費用に宛てんとするのである、吾人が陳べんとする改良法とは成るべく結婚費を節減してこれを教育費となさんとするにある」

結婚の時に美々しき支度をなして人々に誇らんとするのは古來の習慣であるけれども吾人は斷じて斯ることに贊成することは出來ない、女子に簞笥長持等といふ風に充分の支度をしてやつてもこれは決して女子の爲に最上の財寶ではない、衣服も器具も數十年を經れば其過半を消費し盡すではないか若し眞に女子の爲を思ふ程ならば兩親は何故に終身朽ちざる所の財寶即ち教育を女子に與へて置かないのであるか、衣服調度は外から體に着いて居るものであるから何時でも消滅するの恐があるが、教育は心に蔵めてあるのだから盜賊や火災の爲になくなるものではない、兩親にして女子の結婚費に二千圓を投ずる實力あらば吾人は彼等が少くとも其八割を教育の爲に費すことを勸めたい、若し彼等が五千圓を投ずる實力を有せんか、吾人は彼等が簞笥長持などの爲に苦心せず、其女子を一たび海外に旅行せしむる位の壯擧を企てんことを勸めたい、思ふに女子が高等教育を受けたる上に一度海外の文明を實見することは數十襲の美麗なる衣服を有するよりも更に幾十倍の利益があるかも知れない、結婚支度の美々しさを誇るのは恰も黄金の鞍を誇る馬の如きであつて、吾人は多數の兩親が其娘を驢馬の如くなさんとするを見て實に慨嘆に堪へないのである

女子を娶る所の男子も亦女子の教育を標準とすべきであつて、衣服調度や持參金などを當にすべきでない、妻が澤山の衣服を所持すれば夫はこれが爲め十數年間被服費を請求せらるゝことはないであらうが、斯ることのみを考へて女子の教育に思い及ばざる男子は實に意氣地なしといふの外はない、余は女子教育の發達を熱望するが故に結婚支度を誇るといふ虛榮心を排斥したいのである

小説 金の力

さつき子

其の一（上）

「私どうしたと云ふんだらう、此頃本當にどうかしてるよ」

霞の衣とも云つべきうすものゝ見るから涼し相な水色絹の洋服、胸から腕まで眞白なやは肌もあらはの出で立ちに、錦の様な絨緞敷つめたる大廣間の安樂椅子に一人淋しげに寄りかゝつたのは二十三四の夫人。生來痩形らしいのに夏やせの氣味でスラリとした小腰はいとど細そりと見ゆる。

「人からは高等淫賣と云はれやうが、仲居と云はれ様と情激に居た時が一番氣樂で面白かつたわ、あゝつまらないこんな籠の鳥みたいな」何か沮喪するらしく目をすえて、と息をついた

華族様の令夫人に成つてやれ幸福だの、おめでたいのと朋輩や主人から騷がれた時は自分ものぼせてさううれしいと云ふわけでもなかつたがわけもなく鼻が高かつたので、ついあんな間柄であつた菊地さんにさへ、かうした事情だから許して呉れなんて名殘を惜しみながらも何だか自慢氣に見せつける氣味があつたが、それに比べて見ると、「自分は死んだつもりで心を石にしても、貴女さへそれが幸福だと思ふなら斷念も仕様が、眞實僕に愛があるなら、例令女王になつても心が殘つて貴女の生涯は幸福ではないよ、然しそれは僕の自慢かも知れんから貴女がよく思ひ切れるものを無理に決して厭へつけはせん、今の女の一番迷ふのは愛と富と何れを取ろうといふ問題だからね其爲に一生をあやまる人はどれ丈あるか知れんサ、僕はそんな人が不憫で堪らん、若し貴女が後日思ひ當つて苦しむ事があれば御相談相手にならう、然も其時は全く子爵夫人でも何でもない波子さんになつた時で、又僕もただ單き人に同情すると云ふ關係に止まつた時の事で、子爵夫人たる間は恐多い指一本だつて指すまい、又僕とも以前の關係では又と會ふまいからこれが貴女との會見の終りだ」なんてあんなに立派に仰しやつた、なんて高尚な男だらう、なせ私はあの時、私を一生見捨てないで下さいッ」てすがりつかなかつたらう、あんな立派な考でゐらつしやるから女にも自由に／＼と仰しやるから其高尚な御心が私には解らなんだので、御前より愛も薄く不熱心な様に思はれて、あんなに自分は慕つて居ながらまけぬ氣でこんな事に……」

今一度男らしかりき菊地の胸にかの男性なる胸に身を投げよとばかり抱かれて見たいさ懐かしさの餘りよゝと泣き伏した「さういつても相談相手になつてやる、然し其の時は今の波子でもない、たゞの人として、アヽ駄目ッ」と無情の胸の寂寞をせめてはと力づけるべく我と我手にひしと抱きしめた

（中）

急に柔かい靴音がしたのです～り泣の波子は一せきコンとせきに紛らして目から鼻、口と草色の絹ハンケチに輕く拭ふた

「オ、奥はコゝにか、とてかとさがし居つたが」優し相な目を一しほ目尻を下げたのは云ふまでもない夫、野孫子爵、モーちらほら頭には白髪さへまちつてゐるが流石上流社會の紳士丈に裝りが裝りなので四十位に見ゆるもの實は當年四十六といふので自然波子夫人の不愉快も察せらるゝ。

波子はすッと立つて「ア御前でゐらせられますか、つひあまり暑いので胸苦しう御座りましたので」「ア氣分はどうかな、どうだこれから逗子の別邸に行かう、海濱でも散歩すればよくならう」「ヘイ明日は母も參りますから、なんならば御一しよに御供を御願申したいさ存じますが」「では今日はわしは高倉家に招かれてゐるから立つさしやう、では明日の事になつてゐるから一寸顏出して來やう、何なら一しよに行くかな」「いゝえ失禮いたします我儘で御座りますがすぐれませぬので御無禮でていたしましては恐れ多う御座ります」「なに、波子は氣分がすぐれんのに氣兼をするからいかんよ、そんな遠慮はないが、しかしゆつくり休むがよからう」

波子は玄關に夫子爵の馬車を見送つ

波子は家令家扶始め女中にも尤も情があるのであるあんなに若くて御美しくてお優しくて子爵も御寵愛だ、それの者みが下々への御行屆いた御心遣はさ賞めそやした。分を羨やましく思ふのみで何一つ不自由のない御身分の者を見れば眞に波子の羨むもの、さては一人もないのである

波子はまたも廣間に一人淋しく想ひに耽つた

『あゝ何もかも金の力、今の自分には金なんぞ何の獻備にもならん、けれど今此地位を失へばどうだらう、斯くの如き辱のみか、兄も弟も兼ねて御前の御世話で今のあの身分に、悲しむ位は辛棒も仕様が、浮氣ものいたづらものと賤しみ下げすまれ、爪はぢきされるのが弱い自分に忍ばれやうか、といつて此儘老行くの！、何不足ない自分は有がたい様なもの、、心淋しい様で、本當に話友達でさへないのだもの、夫といつても御主人同然、勢はつて下さるものゝ、勿體ないが此方からはどうもお慕い申す事が……」

と波子は云ひ知らぬ情火の心の奥深くむら／＼と燃え上るのをおさへかねた風情に、

「なつかしい人はあり乍ら、このまゝの身分では相見る事さへ叶はぬ、出來るものなら此のまゝで菊地さんを眞の……決してそんな汚らはしい事、許して下さる人でもなし、云つた義理では猶更なし、思ふまい考へるのも罪は同様、淺間しい」波子は胸をも張さけよとばかりかきむしつて泣いた

『でも自分の爲にこの地位を惜むのではないもの、一は親兄弟の爲、一はわれ程と愛して下さる御前を欺いたと思はれるもつらし、社會の制裁、さう社會の犧牲になつてるんだもの』

（下）

菊地道雄といつて波子が母の膝下にある時から其貸二階を借りて政治學校にいつて居つた書生があつた、波子と知り合つたのは其當時からであるが、菊地は卒業して新聞記者となつてもやはりそこにゐたが波子はモー清瀧といふ西洋料理屋の給仕にいつて家には居らなんだ、菊地は其後宴會などで度々清瀧に行く處から深く知合つてやがて雙方から慕ひあつた淺からぬ間柄となつた

波子は先年子爵の後室に迎へられたが、菊地との間は波子の方がよほど熱して居つたのでそれを知つて居つた菊地はいたく不憫に思つた

翌日世話を兼ねて來た波子の母の話によると菊地さんは此頃專ら婦人の自由とか獨立とか婦人の自覺とか解放とか云ふ様な婦人問題を專門にしてゐらつしやるのでお若い婦人の訪問客が多くあるとの事であつた

波子の胸の情火は果してどんなであつたらう……？

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

短篇小説　半身

孤舟

上、生ひ立ち

寛二は柔順な温和な勤勉な性質で小學時代から村の誰れ彼れとなしに愛し且つ敬されて居た。殊に其受持ちの敎員などは寛二が常に優良の成績を得操行なども最も嚴確で加ふるに進取的英氣に充ち滿ちてゐるので「彼れは神童である」と迄、恰も實子のそれかの如くより多く寵愛され剩へ同僚から村役場員果ては其筋の監督者までに「本校の名譽である、當村の寶實である、從つて予の光榮である」と、さも狂せるかの如く、いと誇り顏に語つた。それも强ち無理ではなかつた、かくて彼れは紀元節といふ祝日を以て最も莊嚴なる儀式の下に

知尾郡河富村尋常小學校第四學年生徒
山田寛二
明治十六年十月一日
右者平素學力優秀行狀方正資性勤勉にして常に進取的氣象に富み克く衆生の模範たるに足る誠に殊勝なる段並に之を賞く表彰して筆紙墨を賞與す
明治廿六年二月十一日
各村組合事務管理者
知尾郡長正七位勳八等古山峰藏㊞

以て彼れが幼年時代を知るべきである、されば進んで高等小學に入り尚中等敎育を受くるにも彼れは野頭先づ證書の第一號學年の首席たる正札附きの代表者たる事を以て自ら任ずるに至つた、所詮彼れ寛二は所謂時代の寵兒であつた。

中、蹶起

大麻の山の頂きを、行き交ふ雲に秋立ちて波に響ある石見潟、濱田の浦に專門の學科を修むべく笈を負ふたのは、彼れが十六歲の未だ肩上げ取れぬ乳臭兒であつた、彼れは進取的なると共に自主獨立絶對の自由に憧がれた、彼れは壓制束縛てふものを憎惡する恰も蛇蝎のそれ以上であつた、彼れは斷乎として孤影相對すべく下宿生活の身となつたが、抑幸か不幸か そこに圖てふ王の肌氷の骨鷄冠たる姿は花も色なく嬋娟たる誕せば月も光りを失ふばかり、いとうらたけて類稀なる美人なるに可惜病魔の神の黑き手は凡て人嫌事を吹きかけて、下半身不隨の廢者となすべく世に情なくも將た辛く轉展若悶せしめぬ、吁生來柔順な温和な而も進取的にして心身二つながら絶對完全の自由に焦る、彼れ寛二、いかでこを人事に對岸の火災視してやむべき、袖手傍觀するを得べき、況して怪物軍國主義の獄暴憲兵上等兵窓竹次郎なるもの某家の養子として既に己に愛なきも理なしや五五二十五星霜に於て正しく逕庭ある純潔白百合の如き天眞爛漫々無辜崇高なる天使敏子を辱かしめ、のみかは彼等の常といへ、數知らぬ多くの乙女遊女を玩物視し、以て意氣揚々肥馬に鞭ち佩劍鏘々として傲慢飽く事を知らざる妖怪の辣腕は此、世にも可憐の一小病衰の哀女閨が身上に及ばんとするの殺那に於て！語を更えしめよ非々恣てふ淫獄が今力なく落つる日の、光に眼く迷羊を外妾となさんとするの殺那に於て！彼れ寛二が奔騰せる渾身の熱血は憤然として湧きぬ!!!　やるせなき恨怨の焰は忽宛として燃えぬ!!!

彼れは學課を抛ち親を棄てぬ身邊すべてを抛棄しぬ、一意の念 人道の戰士として奮闘すべく!!!

下、決心

彼れ寛二は多くの波瀾屈曲身に餘る憂愁を抱いて宛がら敗餘の落武者が都大路を忍ぶ盡せぬ怨みを噛みつゝ、閑ある田舍に敎鞭を執つた、閑爽幾星霜彼れが書齋は社會主義無政府主義、自由主義、共産主義さてはバグーニンの無色無形主義クロパトキンの相互扶助基督敎社會主義無主義始め發行禁止發賣停止の刊行物を以て埋められた、砂糖水的會黨はいふ迫害を如何避難を奪ふの暴壓を奈何と、おびゆる、中に彼れ寛二は田舍なるを幸ひ斯る環境にも陷らず而も大に最も率直に熱誠に卓然として隣人知己朋友親戚同僚、嘗も彼れと語を交ゆる者には悉く、諄々天を覆ひ滔々地を捲く時代の思潮を說いた、一面彼れは徒らに机上口角泡沫を飛ばすの愚をなさず年一年日一日と具に留め盡せる現社會の悽慘たる暗黑面に對する最も該切なる方法と手段とを加味して果然風手亭々細柳楚々一度星眸開けば西施面を覆ひ一度朱唇笑めば貴妃色を失ふ雲路の赫姫(かぐやひめのこと)乎[illegible]乎、そも彼れは何者ぞ姓は梁名は燕オー梁燕汝が徐徐として逍歩を逞す時、滿街の子女を笑殺し風流の貴公子を腦殺する幾何ぞ、容姿正に然り加ふるに彼れ黨が炎々燃ゆる鮮血の焰迸射して愛の結晶となる所、何物をも溶化し盡さずんばやまず、あゝ彼れ黨汝は果して寛二が主義の化身理想の花たる革命的婦人であろうか使徒の生命であろうか、一日黨は

例令明日斷頭臺に登るとも
光榮ある使命に微笑さんかな」と

華やかに吟じた、其餘韻永く永く響いて寛二が衷心の琴線に觸れた、寛二は

西比利亞の胡砂吹く風にさすらいの
眞理の御旨に果てんのみ」と

衷心徹かな而も強き堅き反響を漏した

嗚々!!!　彼れ等が運命や將たいかに!!!(完)

謹告

なで

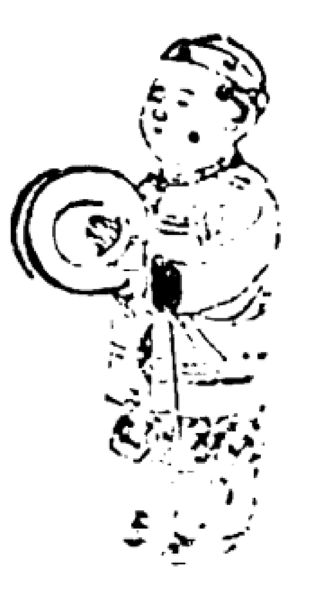
三日に發送を濟まして、すぐ旅路を辿る積りでしたが、東海道線を入る一日に乘車して來た友の話しに、東海道小山山北間の隧道が破壞されたので、其處を徒歩せねばならぬのですが、婦人などは、とても底しれぬ谷を眼下に眺めては、男子の如き細き假の橋なる一枚の板の上を通る事が出來ませぬ私しは何にも知らずに上京して、其上を通る時は、生きた心地がありませんでした、さても神經質のあなたには、通行出來ませんよとの忠告に急ぐ旅にも非ざればと今一ト縮輯を濟ませて參ることにしました

堺氏著の婦人問題に就て

ひで

婦人問題は吾等女性たるもの、大いに著者に向つて感謝し、過去五千年の長き夢の連續史より覺めて此眞理を味ひ此眞理を生命として現社會の奴隷制度と奮闘せざるべからず、特に第四階の自由の女子、經濟的革命等は我々の最も沈思熟慮を要する極要の箇問題なれば、次號より吾が感せし儘と其箇所を轉載する事を著者に請ふて、諸姉に御紹介致しましやう、實は本號より詳しく御紹介する覺悟なりしに先日來、どうも、頭痛堪へ難く、日々痛みを增しますので、本號編輯濟み次第、暫時轉地療養する事に致しました次第で、また讀了して居りませぬし、勞々次號に延しました、亦編輯日誌も八月十五日から、毎日其出來事を記して置きましたから、是も次號から掲載致します

ア、學識無く才能無く加ふるに、失敗に失敗を重ねたる罪多き恥多き身の所詮、斯かる大事業の一朝にして効果を奏する如き非望を持ちしに非るも、さりとては、憂き世そを自覺する同性間の雨夜の星なるを思へば、驅き拔れたる吾は自暴自棄せざれば、痛恨悲憤の念、轉た止まぬのです、そうしては幾度か筆を抛ちました、とても吾が能力の及ぶべきに非ずと、しかし地方の諸兄姉より數ならぬ身に望外の光榮を荷はせて頻りに鼓舞作興せらるには、吾身の無能も打忘れて亦勇氣を奮ひ起のですが、前途の遠きを想察すれば弱くして愚かなる吾は實に身の重任に頭を惱ますのであります、次號の編輯までには歸京の積りですが少しの延期は何分にも御諒恕を願います



八月十五日日誌の一節

けふは早くから巣鴨監獄に石川兄を訪ふべく、前日から其積りなりしに、十四日は、雜誌の發送日とて、非常に忙はしく、是迄は長子が帶封やら發送の手配を背負一つに引き受けて、私は、手傳ひ位ひの有樣であつたのですが、去る廿一日に渡滿の途に就きましたので、今度は、おばさん(雇女)を對手に、發送やら配達やらで殆んど昨する斗りでした、夜に入りては書店へも自分持廻りし程でしたが、其夜歸宅すると、俄かに疲勞を感じまして、寢に就くも眠られず床上に輾轉反側しつゝ、拂曉に至り少し睡りしかと思ふと、お婆さんの聲として奥さん奥さん、早くお起きなさいまし、けさは監獄へいらつしやるのでは、ありませんか、もう、御座いますよと、呼ばるゝ聲にては、しなしたり、深尾さんとの約束もあり、今日はどうしても監獄へ石川兄の押印を執りに行き、辯護士に檢事の上告に對し辯駁書を出してもらはねばならずと、起きは起きしもの、何分にも、十里も徒歩せし樣な足のだるさにて、兩股のふくらみ凝りて、歩行自由ならず、擲て、加へて早朝より暴風寒雨といふ有樣、是れではとても池袋から監獄迄の徒歩むづかし、と、けふだけ、人車の御役介になる事に決心し、先づ九時五十分の新宿發にて池袋まで汽車に身を托し、池袋からは人車に身を托して、思ひ出多き巣鴨の監獄に着し、面會願を差出し置き、待合所に待ち居りしに、凡そ一時間斗り待ちしも、呼び出しなし、これは車夫君に相濟まず、待賃とては、吾が囊中に僅の流車代を除く外二錢を餘すのみ是にて一時間の待ち賃は滿足せざるべし、斯く待つならば往復の約束せざりしにと、待つ間も車夫君の事のみ氣に懸り、堪へられざれば寧ろ車夫君に此由を告げて、往復の料を拂ひ返さんものと門外まで凡そ二丁斗りもある砂利の中を歩みかけると、後ろより、何處へ行くと監守先生は聲かけられぬ。(未完)

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●小説 木兎（上）

谷尼水紫

植へて此處に幾百有余年の松がある、夫れが五本六本十本二十本而も曲がつてくねつて大空に突き立つて居る、其皮が各龜甲に烈けて過去の歴史は此龜甲の大小と厚薄に印されて居る、尼子が毛利勢を破竹の勢で追ひ廻した時の光景を見たものは今は此松斗りだと云つたお爺樣も死んだ、お爺は死んで行く松は依然として其枝を張り其幹がたつて大空を其小さな掌に覆ひ盡さうとする其龜甲一つが人間の命の五十年に當ると聞人の誰れかが云つた事がある、而し、松は人間が死んで往かふが生れて來ようが、其樣な事は平氣である、只松の希望は其曲つた幹を何は曲りながら其茂つた枝を何は茂りながら、限りなき大空に蟠まるより外はない、人間の樣に女を見れば妾に仕樣と思ひ、金を見れば僞瞞を働かふと考へる事はせぬ、其樣に松は復雜な生活は嫌ひだ、松は人間が餘りに多情多念なのを竊々と笑つて居る、松は人間の限りなき命を多情多念の爲めに三分一に自縮して顧みぬのを悲しむで居るかも知らぬ、此單純な松は枝を垂れて八幡宮の祠を圍んで立つて居る、蟬が其淸想をもつて抱き付いて松の心を引く樣に鳴く、鳴くけれども松は蟬のために何事をも語らぬ、終に蟬は腹を立て、何處かへ飛び去る、飛び去るかと思ふと亦代つて抱き付く、蟬は松の本意は知らぬ、松は蟬の希望に何等の關係も持たぬ幾日鳴かうか何遍來ようか松に取つて責任はない、蟬は夫れでも矢張り來て終日鳴いて見る、而し之れは蟬のために甚だ氣の毒である、氣の毒ではあるか松は自己の主義を人の爲めに中折する樣な弱行者ではない、蟬は終に飛び去る、蟬が飛び去つて松かホツと息をする時には松の理想の大空は美しふ色彩られる一帶の銀河は何のどよみもなく流れて居る金星銀星大小各美を競つて輝で居る、松は此星を見る度毎に、ぞつとする斗りに憧せれる、何故に憧かれるかは松其者でなくては知る事は出來ない、丁度人間が或る高潔な理想のために幾多の犧牲を忍ぶのと同じ事だろふと想像するに過ぎぬ、而し此憧かれは人間が名利のために屈辱を辭せぬが如く、性慾の遂行に幾多の邪婬を敢てするのとは少しく意味が違ふ事は明らかである。

松か此美しい憧かれを續けて居ると何時か其梢の暗に大きな木兎が來た、クリクリした眼は其ふくれた頰髯とよく調和して居る木兎は松の理想があまりに高きに過ぎると云つて笑うて居るのである、ホウホウと笑ふ、其聲が如何にも奇調に響く、お前が幾ら大空に憧かれても其足は到底地を離れる事は出來ない、余りに馬鹿げた理想に憧かれてズン〴〵伸びるとやがて人間が來て切るよと忠告的に言うのかもしれぬ、松は之れにも驚かぬ、却つて短い命の木兎が忠告的な言葉を笑つて居るかも知れぬ、松は木兎の忠告よりも蟬の鳴聲の方が幾らか嬉しいと感じたかも知れぬ、而し一切何卒の應答もせぬ。木兎は矢張り鳴く、星はきら〱澄む、木兎が忠告的罵倒に倦いて大きな眼をシバ叩く時に星は愈々澄み切つて居る、松は大きな黑い枝を其大空に擴げて憧がれの冥想を續けて居るのであろふ。

此時オギャア〱と小兒の泣き聲がする、ネン〱ネンヤ、──と女の聲がする、オギャア〱とネンネンヤーとの間にホウホウと木兎が鳴く、オギャアーホーと聞へる木兎は松の感應のないのに倦いて此小兒の泣き聲を笑ふ事にしたのであらふ。

松の理想の憧かれか最高點に到達した時は夜は已に曉に近い、四隣死して聲なく風籟音を靜めて只木兎君の笑聲が松の憧を縫うて眞黑な帳の中をさまよふ時である、此の時にオギャアたり子ンネンヤーたるものは天娘の人間界を脫離して暗黑なる仙界の小徑をたどる音である、其のオギャたる聲は未だ神の至らぬ聲界の叫ひ、子ンネンヤなる一聲は再び光を見る能さる深淵の喚きである

木兎はホウ………………ホウと鳴く

やがてカタンと戸の開く音、ゾロゾロと下駄を引く音、夫れが徐ろにオギャアに近づく、何事かと耳を澄す時木兎がホウ　と近く鳴く

「お〻可愛い〱　お〻

と女の聲オギャアが切つた樣に止まる

「丁度赤眼が醒めてなー、お客さんの方は眠くはないかな………

「いんへ、今能く寢られましたお母さんはいんでおつていな

とネンネンヤーと同じ聲で云ふ

と云ふ時乳にむせたのか又吃驚した樣なオギャアか聞へる、木兎がホウと鳴く、隣の裏戸がカタンと閉ちる、ネンネンヤーが家に這入つたのであろふ、間もなくエヘン〱と二つ斗りの咳拂が聞へる、コツンと火鉢を叩く煙管の音がする、裏戸が再び開ひて人が出て來る

「千代さん起きてだー、早う………………起きてだせ

と小さな聲はネンネンヤーである

「まだ呑んで居りますが、　金チャン………………サ放せお母さんと寢や………………

と云う、間もなく裏戸が閉ちる、木兎がホウホウと鳴く小さな聲でネン子ンヤーが松の暗の方へ遠かつて聞へずなる、コツンコツンと火鉢をキセルで叩く音がしてギイ〱と梯子をよじる響き、間もなく、低語の男女の話聲が續く、十分間程經て此話聲が途切れて靜かに成る、ネン子ンヤーが遙かに聞へ出す、追々近づく、木兎がホウホウと鳴く、オギャアと一聲又續てオギャア〱〱と急ーくなる、ネンネン〱ネン………………ヤーと云ふ、オギャアは中々止まぬ、ギクギクむせぶ斗りに鳴く、トントンと足拍子を打つ地響きが枕に來る、チン〱か急ーく操り返される

『お母アーは今要事だよ……金チャン啼くな啼くなよなー、チンチンヤー、金チャンお母あは用事だよー、寢た子はよい子だよい子だよー、チンチンチンネンチンヤ……

之れでオギャアは少しく靜まる、足拍子が寂寞を傳うて枕にヅン〱と輕く響く、木兎がホウホウと鳴く、松の憧がれの枝に隣りの二階の有明がスウと稻光の樣に其線を射る

（下）

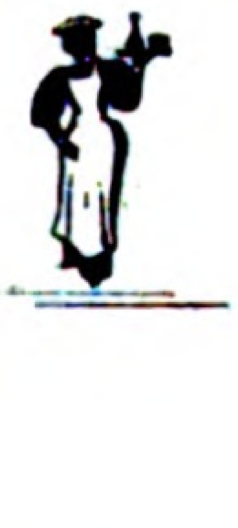
人間は凡て物の自由を縛して愉快だと叫ぶ動物である、櫻の花は美しい梅の花は美しい、美しいと斗りでは滿足せぬ、必ず之れを折る、折れば花が散り葉が萎む事は知つて居る、實のらぬ事は元より知つて居る、が櫻の花が散り梅の葉が萎み、櫻も梅も實らぬ位は折ると云ふ慾のためには何等の罪惡であるとも感せぬ、否感じて居ても之れを敢てする、即ち物の自由を失う事を悅ぶ花が蕾を蕾む時必ず之れを鋏る、人が正義を口にする時必ず之れを罵る、花が實らんとする時必ず之れを折る、人が神の道を說く時必ず之れを縛する。

千代さんか花盛りは金のために折られた、母一人娘一人の幹と枝は憧かれの大空を睨みつゝ終に折られて仕舞つた、金粉燒きの器に挿されて床の上にチンと置かれた、辨の少ない、色の薄い花は咲いた、咲いたが夫れは仇花である、匂ひもなく香もない花である、金の爲めに咲いた花である、而し仇花は仇花ながらに一盛りの盛りはあつた此盛りは神が千代さんに與へた盛りで其折つた者の罪を折られた者の哀れに至らしめぬ神の聖旨である、此盛りは花は仇花であり、金のために咲いたものである千代さんに實と云ふ尊い者を與へた、而し人間は花の美を知つて未だ實の貴すべきを知らぬ、元來實なるものを求めて花を折るのではない、其小さ〱した唇に甘い接吻が受け度い斗りに折るのである、實を望む者が花を折るべき眞理はない、かくて終に實と成りたる千代さんは二本指で抓まみ上げられて金粉燒の器から捨てられた、實は人間の眼には美ではない、實は人間の眼には苦痛である、即ち其苦痛のために千代さんは捨てられた、千代さんは實と共に虛空に迷うた實のために犧牲たれば幹を如何にせん哉、幹のために犧牲たらば實を如何せん哉、終に幹のため實のために此花を如何にせん哉である、千代さんは淫賣と成つた、千代さんは生れて五ヶ月の金チャンを抱いて萬客に侍する、金チャンは神の子である人間の兒ではない、お母さんが淫賣を働く爲めに何の遠慮もせぬ、乳を呑まずに大きくは成れぬ、夜でも夜中でも乳は呑まねば神の子として生る事は出來ぬ

金チャンは泣かさる事を得ぬ、悲しければ泣き、嬉しければ笑ふ、之も神の聖旨である、お母さんの淫賣なかせぐ間悲しさを忍ふ事は出來ぬ、金チャンの思想は天國に入ろにある、乳も呑まず泣きもせぬものは人形である。人形として金チャンは滿足する事は出來ぬ、お母さんが客に接する數時間を人形なれと命ずるのは元來お母さんが無理である、金チャンの關する處ではない、ましてやお母さんを買う處の惡魔の御氣嫌を覗うなどは神の子たる金チャンに出來ないのである、千代さんは實のために犧牲となり幹のために犧牲と成つて、可愛い〱金チャンが下で泣く時、死んで行く冷たい嘉ない心地に稱塔へで白い胸に包み切れぬ涙を傳はする時、氣の毒にも思わず可愛想とも思はず、大きな胸に波立てつゝ蛇の如き閑の瞳みに性慾の炎を燃して其細き頸を抱く色黑き双の腕の動く時悲しさを忍んで居る事の出來る人形ではないのである、實は仇花の實であるが而し生れて花の精受け、此盛に神の聖意を全うせる口鼻眼耳總ての官能が動く金チャンは而く自由を縛されはせぬのである

性慾の奴隸たる人間は此裏若き美くしき兒持ちの淫賣を珍らしがる、兒持ちの淫賣は抱車のお婆さんの面影がある、飛ぶ鳥も落つる分限の匂ひがする、此面影此匂ひは物好きな、物の自由を束縛し、花の美を折る人間の愉快に頗る適合する、加ふるに兒持ちの美姸と來ては其珍其奇又頗る妙味である、かくて金チャンは毎日毎夜孤閨に泣く、時には理想の高い松の木影をお袋の懷に抱かれて木兎に笑われに出る、ホウ〱と鳴く木兎は松が自分の罵りに答へぬ無趣味に倦いた時毎夜此神の子の金チャンが來る可く待つて居る、千代さんのお客と金チャンの木兎と何れが如何であるかは此幾百有餘年の大きな曲つた松が知つて居るであらう。

（完）



Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

▲石川三四郎兄より

御老母や奥さん御機嫌如何▲僕ヤハリ痩せながら頑健▲先日は法廷で諸君に會ふとが出來て嬉しかつた▲アノ夜は非常に精神が激昂して全身焔の如く熱し、アノ儘東京監獄で御免を蒙るのかと思はれた▲此二三日前又た〳〵檢事殿上告の通知が來た、檢事長富倉某の上告趣意書といふのを拜見したる事無い事大分並べ立てゝの申條には實に恐縮した▲『パンの勝利』は非常に面白かつた、僕は從來の自分の理想をハツキリ説明して貰つた樣な氣がした、收用論（エキスプロプリエーション）の一點は是れクロポトキン翁獨特の所であらうが、實に龍を畫いて睛を點じたとでも言ふべきである、併し其「收用」の時機に達する迄の運動を如何にすべきやは、吾々が愼重に考へねばならぬ問題だ▲此頃は暑いのでサツパリ勉强しない、近世哲學史、平語など讀んで、今ブリスの社會改良辭典を飛讀みして居る、獨逸語は巣鴨に來て初めた、毎日聖書に依て少しづゝヤツて居る、萬一ものになればお慰み▲此程支那人呉弱男女史より手紙が來た、中に『愛する兄弟、余は我が國人の自由の歌を歌ふべく、自由の鐘を鳴らすべく、自由の堂に急ぐ日の近きを悦こぶと言ふて居る、敬すべきではないか、そして自分を支那の妹と言ふて居る、日本の廂髪などはトテも駄目だ▲南君等の公判は如何なりしや此一日より開廷の由は同君よりの書面で知れた、先方からは時々慰問して呉れるのは僕からは書信するとが出來ぬ、序の時に宜しく傳言を賴む▲福田からブリタニカを二冊差入になつたが堺の方が困りはすまいか、僕はモツト後に都合を見てと言ふた積りだが▲諸方の同志から多く慰問を受けるが返事を出すとが出來ぬ▲先日横濱の大和田君より貰つた端書で、居ながら故鈴木君の墓に詣でた、我黨同志の不幸多きを思ふて遂に赤衣の袖を濡した▲逸見君、昨日は有がたう、其節僕が話した考案は君だけの胸中に納めて呉れ玉へ▲福田姉に申す、此頃は小供が居ないで嘸ぞ静かでしやう、ドウか此間に命懸けで内觀工夫をする樣に願ひます……▲『宗教の進化』といふ書籍を御購求の上差入して貰いたい（之は逸見兄に）▲獄中生活の苦痛は經驗の無い人にはトテも想像できぬが、此節では監獄の設備が萬事に行届いて居るので、苦痛の中にも安心して一身を托するとが出來る▲今僕等の居る監房の前後には桐の葉が一パイに茂つて居る▲青芝生の大廣庭に多勢の囚徒が行列する樣は恰も赤衣の一揆が勢揃をする樣でいかにも勇ましい▲諸君によろしく（巣鴨秋水氏宛）

▲田中翁より　今朝三國橋一丈九尺七寸の水増し未だ雨止まず風あり二丈二三尺に達せば堤水中に沒せられて、不必用の瀦水池は更に又害のみとならん、谷中人民は動く能はず、移るべき處なく、家具腐朽し、食盡きたる人もありて、更に天災に泣けり、（廿五日）

利根川も亦渡良瀬川の去る頃の如し、今回利根川の洪水は一丈八尺（十六、七日）に及ばずして、人畜多く死して流れ、家及び諸材も多く流れて此洪水逆流地の栃木縣、北埼玉及び茨城の逆流地に漂着せり是れ利根川、上流水源山林の濫伐より急激の變化を證明せるなり亂筆（廿八日）

▲宮本繁次郎氏より　此暑いのに御苦戰の程一ト通りで御座いますまい、且つ折々御不快の趣き、心痛に堪へません、此頃は如何ですか御伺ひ申上げます、主義も大切で御座いますが、御躰の御保養も怠りたまはぬ樣切に御願申上げます、カクは同情メキたる事申上るもの、御一人にて萬端御切り廻し遊ばす事なれば其御養生さへ必らず御心に任せぬので御座いましやう、夫れにつけましても小生は如何に無力なればとて日々無爲に暮し居る自分を省み耻入る次第です、別紙小爲替貳圓金毎度御手數のだん恐れ入りますが御受取りの上内壹圓也堺保子さんまで御届け煩わしたく殘金は甚だ輕少ですけれど御運動金に御充て下さらば本懐に存じます（八月二十日）

▲安部磯雄氏より　拜啓先日は華墨頂戴誠に難有存じます御令息樣もいよ〳〵清國へ御渡航の由御安心の御事と御察し申します小生は日々海水浴をやつて居ますが可なり仕事が多くて忙しいです、原稿、讀書などいたして居ります、昨日は八里許りある鴨川と申す處に參り女房教育の爲に演説しました何れ二十日頃に歸宅します別紙は誠に間に合せです（八月五日）

▲田添鐵二氏より　福田女史足下　改革者の仕事の内で最も困難なる方面に單獨御奮闘被遊る御心事御察し申上ます、毎號の『世界婦人』拜讀しては我等のような心弱きものも、自然に強きインスピレーションに打たれる心地いたされます

御約束いたしました事もあれば、何かツマラヌ物でもとおもひ、實は度々筆とりあげましたけれども、『御婦人の事は御婦人でなからねば』その考へが、何時も浮んでくるし、強いて物識りの積りで申上ました所で、問題の中心を外れツーであるし、ドーしても興のらず、物になりません。モー少し御ゆるしください

往くさきは遙けき千里の險路、其上御道伴の方は少なし、ドーぞ〳〵、呼吸を十分に入れて、同胞女子解放のため、執念深く御すゝみ遊ばされたく御祈りいたします

▲原子基氏より　永らく御無沙汰いたしまして濟みません、甚だ恐れ入りますが、右の文六號活字にて御紙の一隅に御掲載下さいませんでせうか而して其分一部北海道虻田郡眞狩村喜茂別山本清作氏まで御送り下さいますやう折入つて御願ひ申し上げます

△ルスツ町　『世界婦人』の谷中村民救濟の記事に吾等も心を動かしたが平生の貧乏ゆゑ如何とも詮方が無い、幸ひ農場に傳道用の幻燈があつたので之れを利用してルスツの町に幻燈會を開いた、集る人長幼三十五名、漁つた金額四十三錢、これは主に日曜學校の可憐の女兒の手より出たるものである、同胞の困難に同情せる北海の少女の心根を察せよ

△八ノ原　舊五月節句八ノ原なる吾等の農場内に於て催し農夫や樵夫に説いて金九十三錢を集めた

△キモベツ　七月二十一日、蝦夷富士の翠影を眺むるキモベツに開き五十名の村民を集め金十九錢五厘を獲た、山本清作氏が吾等のために多大の援助を與へ且つ金五拾錢を寄附されたこと、驛遞主人阿部氏が吾等一行三名に義侠的に宿所を供せられたことは共に深く感謝する所である

△再び　次の夜少し隔りたる樵夫小屋に佐藤萬治郎氏の招きにより再び幻燈會を開き七十名の勞働者に大に主義を宣傳した、尚同氏の好意により吾等其處に宿泊し金壹圓の寄附を受けた

△キモベツ方面の運動は主として札幌農學校の同志大石君の來り助くる所であつた、尚右の集金はルスツの基督信者齋藤安見氏に托してある

●遅れ馳に　渡邊博

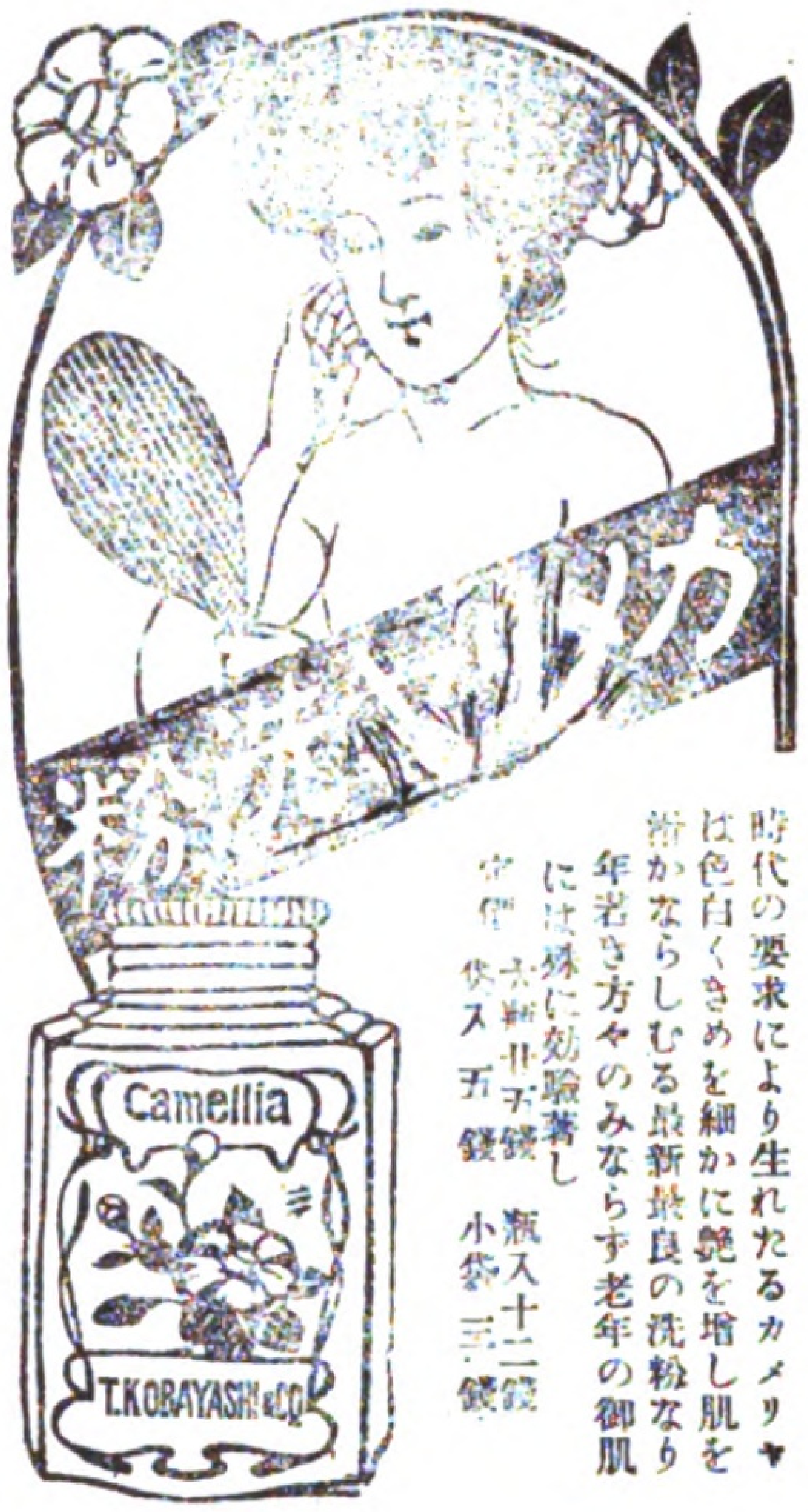
御贈り下されました雜誌世界婦人、初號より拜見いたしました、秋の千草のそれに似て、誠先輩の玉稿、艶なる、尤なる、一味深さ、穩健なる、何れも嬉しき心地いたしました、婦人問題につき何かとの御言葉、未だ身の方向も確定しませぬ自分ですから、何うして、何うして、斯かる大問題を喋々することが出來ませう、斯とは申せ折角の御言葉ですから、不圖胸に浮んだ事を一寸記して見ませう

誰しも御存知の通り、從來の婦人は、殊に日本の婦人は、皆總てが家庭を中心として教育され、養成されて來たものでせう、で是等の家庭的婦人は、飽までも柔順に、飽までも温良に、飽までも貞淑でなくてはならぬ、殊に半生の苦樂を倶にする夫に對しては、毫末も反抗の態度を執つてはならぬと謂ふような思想を絶えて居られたのでせう、要するに婦人は何處までも男子の奴隷である、わが身の自由は到底男子の權力から奪ひ去ることが出來ないのである、と觀念して、往生して、諦めて、居たものに相違ない

所が今日の時代では、こんな諦め主義や、奴隷主義はもう自然的消滅の運に傾いて參つたので、幾多の姉妹に關する悲劇が到る所に繰返されて、夫の腕に安き眠りを貪つて居た現代の婦人姉妹は、茲に仄けくも自覺の光明に接したのではありませんか、前年の日露戰役が産み出された、悲慘なる事實はこの自覺に至る導火線となつたものと思はれます、兎にも角にも御婦人方が、自己を意識したことは、事實で御座いませう、とこの世界婦人などは、時代の所産物であると謂はねばなりません、然り是れ時代が産むだ物に相違ありません、一片の孤舟能く大洋を棹すで、世界婦人は、今汪洋たる潮流に棹して居るのであります、汪洋たる潮流とは何でありますか、是則ち現今の社會に於ける、腐敗、墮落の濁流でありませんか、繊弱き婦人は、その男子の横暴に泣き、社會の暗黒に泣き、習慣の厭制に泣き、斯くして終に悲慘なる死を遂ぐるのであります、世界婦人は今是等の婦人を濁流の中から救ひ上げつゝあるのです、あゝ何たる福音で御座いませう、あゝ家庭を中心として養成された婦人は、最早何の役にも立ちませぬ、因循な、姑息な、誰も繊樣のやうな婦人は、已にカビが生いて見向きもせない時代となつて來ました、則ち自分は世界的な（一語弊があるかも知れぬ）立派な社會その物を中心として教育された、健全な婦人の各方面に出現されることを希望し、且つ歡待いたすのであります

この點に於ても自分は世界婦人の發行を賛し、漸進的に發展あらんことを欲し希ふ所で御座います（八月十日稿）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY



本舗　ライオン歯磨發賣元　東京神田區柳原河岸　小林富次郎

時代の要求により生れたるカメリヤは色白くきめを細かに艶を増し肌を滑かならしむる最新最良の洗粉なり年若き方々のみならず老年の御肌には殊に効驗著し

定價　小袋廿五錢　瓶入十二錢
　　　大袋五錢　小袋三錢

文學士　倉橋惣三君編　⦿基督教こどもの本　第一編「いらくさ」第二編「なみ子のいす」（以下順次刊行）　定價六錢　郵税二錢

文學士　小山内薫君著　⦿新訳小野のわかれ　定價二十錢　郵税不要

中村春雨君著　⦿繪入キリスト物語　定價十二錢　郵税不要

宮川巳作先生著　⦿加拉太書研究（近刊）

松本赳君著　⦿女流文豪ジョルヂ、エルオット（豫告）

附録　アダム、ビードの梗概、サイラス、マアナーの梗概

注意……御注文の際は最寄郵便局にて振替貯金の用紙を貰受け表面には御送金の價格を裏面には御用向を御記載の上振替貯金口座六三三〇番中庸堂宛にて御注文被下候はゞ一々端書を御差出なくとも御用向は辨じ御送金は無料又僅か手數料二錢にて然かも安全に弊店へ届き申候

發兌　東京神田裏猿樂町二十五番地九段通　中庸堂書店

商店改築大擴張

カルタ歯磨は　口中にある諸種の細菌を殺します
カルタ歯磨は　歯牙のゆるみを緊縮するの効がある
カルタ歯磨は　口内の悪臭食物滓渣の腐敗を防ぐ

絹手巾種々
造花類種々
西洋小間物

東京市京橋區尾張町二丁目八番地
光明堂
電話新橋二七六七番

カルタ歯磨は　アルカリ性なれば口内醱酵を防ぐ
カルタ歯磨は　最も微細の粉なれば歯を磨耗せず
カルタ歯磨は　常用すれば口腔歯牙の諸病を防ぐ

根本正君譯　片岡健吉君序　日々の力　紙表紙三十五錢　クロース表紙五十錢　郵税六錢

本書は一月一日より十二月三十一日に至る一年三百六十五日間に於ける居家處世の大本を示したるものにして、每朝其當日の部を一頁宛讀むべきものとす、世人之を繙いて反覆諳誦せんや、新氣力新生命は自ら其の間に生じ來りて無限の快を得べし、故に聖書と等しく一般家庭に必ず備へられんことを推薦す。

日本メソヂスト監督　本多庸一先生　說教集　紙質精撰寫眞入全六十錢郵税八錢

是れ先生獨特の通俗的思想を以て深遠の眞理を極めて平易に懇切に說話せしもの、今日までありふれたる翻譯的口吻なく先生が特創の思想を以て日本の人情に投合し、一言一句皆韻雅々として讀者の胸に措かざらしむ請ふ一本を座右に置かれんことを

神學博士ジエームスアトキンス著　大谷虞氏譯　兒童の宗教　定價四十錢　郵税六錢

本書は近年大いに發達せる科學の一なる兒童心理學に就きて、靈的生命を養ひ兒童の時期なる神に近づき易きに乘じて、終生磨滅すべからざる印象を其胸中に留めしめ神の光榮を發揚すべき天國の戰ひも是を兒童の靈的教育に俟ち、少年時代に早く消せし信仰の花を罪惡の風未だ之を破らざるに先きんじ、これを保護愛養せんとするにありと教ふ、今や我國家庭と教育の事に心を用ゐるもの必らず、一本を座右に備へざるべからず

英文　俘虜看護誌（原名 At the Mercy of Tiberius）　定價三圓　郵税十二錢

著者日本にありし露國一俘虜の妻

好評嘖々興味津々一たび之を繙かば感興措く能はず其内容は八月廿五日國民新聞に於て德富蘇峰先生に由り紹介せらる部數限り有り大至急注文せられよ

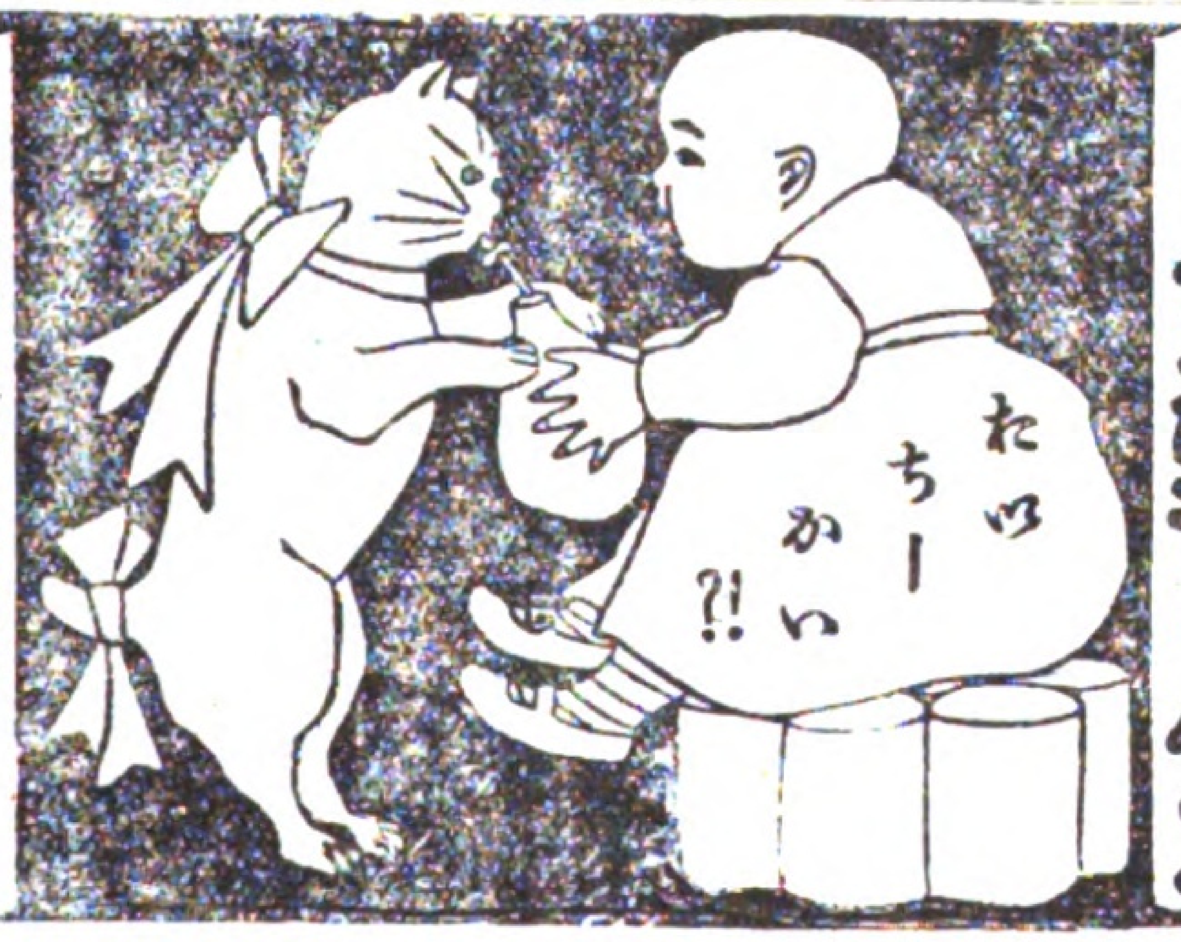
ジエールドン、原著　美山婦人、田中英雨女史譯　七日間

定價金三十五錢郵税金四錢

道に迷ふた人の子が、たうとい愛の力によつて救はるゝ、世にも美しい物がたりを、優しい筆に寫し出した此の本は、今の讀みものとして極めて適當なものでは御座いますまいか、迷ふ人も救はれた人も是非一度は御讀みなさいませ、そして此の小さい一冊の中に深い教へと盡きぬ慰めとを御見出しなさるならば譯者二人は苦心の容しからぬを喜ぶで御座いませう

其他諸大家の名著澤山有之候品切にならざる內至急御注文を乞ふ

東京銀座四丁目一　內外書肆　教文館　電話新橋二五二六



伊豆三島　花島煉乳場製　名譽ある　金鶏ミルク

發賣元　東京市日本橋區大傳馬町　逸見山陽堂　電話浪花二一五番　振替貯金口座三九一六番

國木田獨步著　再版　武藏野　定價廿四錢郵税八錢

再版　濤聲　定價十八錢郵税六錢

東京神田表神保町　彩雲閣　振替口座一〇五

腦病、脊髓病　神經病、精神病　專門治療
土地高燥　閑靜　電氣療法　マツサージ水治法
東京田端停車塲西二丁
東京腦病院
電話下谷三三〇二番
院長　後藤省吾

新築落成移轉
小兒病　內科　外科　診療
府下淀橋町角筈（水道前）
淀橋醫院
竹下繁太郎

應需　肖像畫
神田區美土代町一番地
浦田烏城

小兒科　內科　婦人科
每日自午前八時至午後六時
淺草區馬道三丁目
小牧醫院

定價（一部四錢五厘、十部四十二錢、二十部八十錢）
編輯兼發行人　東京府豐多摩郡淀橋町字角筈七三八番地
印刷人　東京府豐多摩郡淀橋町字角筈七三八番地
發行所　東京府豐多摩郡淀橋町字角筈　人　社
印刷所　東京神田區雉子町三十四番地

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY